

## 「捕鯨の倫理的ディレンマ現在的主張と位置」

Jes Lynning Harfeld (デンマーク・オールボー大学)

捕鯨の倫理的側面についての論争を理解するためには、2つのアプローチを見分けることが重要である。私たちは、この区別をタイプ（種類）としてのクジラとトークン（個別の存在）としてのクジラを区別することによって記述することができる。一タイプとしての倫理的な意味でのクジラの重要性（もしくは第一義的な重要性）はあるグループ・種の部分としての重要性である。タイプレベルでの議論でまず大事にされるのは集団であり、議論は通常、環境倫理の中で枠組みが作られ、狩猟の持続可能性に焦点が当てられる。トークンとしてのクジラの重要性（もしくは第一義的な重要性）はそれ自体が個々の意識のある存在であることとしての重要性である。したがって、トークンレベルでの議論は、人間が他の人間に対してどう行為すべきかについての倫理的議論にほぼ似たような特徴を帯びている。ここでの焦点は福祉およびあるいは権利のさまざまなバージョンとなる。タイプとトークンのそれぞれについての前提や議論が、捕鯨の倫理においておそらくもっとも意見が割れる領域、すなわち商業捕鯨と（先住民）生存捕鯨の違い、という問題において活用される。私たちが、クジラと私たちとの関係を理解し、この関係がいかなる種類の倫理的意味合いを持っているかについて答えようとするならば、「商業的」、「先住民の」、そして「生業」のような概念の意味をもっと明確にしなければならない。